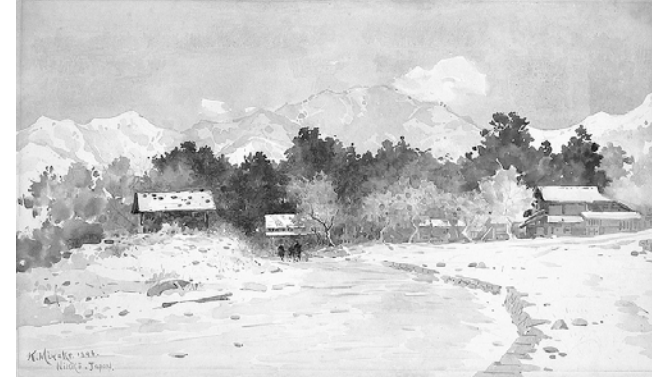


ギャラリー ⑩

このコーナーでは、市で所有する絵画を紹介します。

「日光」



三宅克己作 1896(明治29)年 紙・水彩
29.4cm×49.4cm 小杉放菴記念日光美術館所蔵

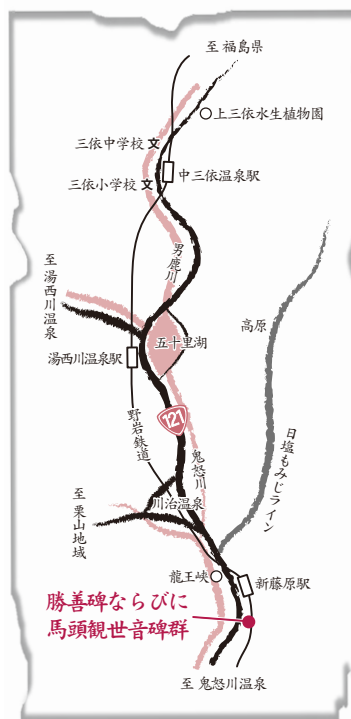
三宅克己(1874~1954年)は、明治後期から昭和中期にかけて活躍した、日本を代表する水彩画家の一人です。徳島県徳島市に生まれた三宅は、来日したイギリス人水彩画家ジョン・パーレーの作品に感動し、水彩画家を志して修行に励みました。しかし、新進気鋭の画家として活躍をはじめた三宅を待ち受けていたのは、日清戦争勃発による従軍命令でした。1895年1月から半年間戦地へ赴いた後、1896年5月から1年間、現在のソウルに駐屯しました。まだ雪化粧の残る日光を描いた本作は、作品の左下に「K.Miyake.1896.Nikkō.Japan」というサインがあり、二度目の従軍直前の1896年初頭に描かれたと考えられます。三宅は自叙伝「思い出づるまま」に、最初の従軍からの帰国後、富士山や日光、箱根などを旅して描いた水彩画を、横浜の画商を通し外国人へ売っていたと書いており、本作がまさにその時期の作品であることが分かります。二度目の従軍からの帰国後、すぐに渡米し、本格的に水彩画家としての画風を確立していったことを考えると、本作は、三宅の初期の作風を伝える大変貴重な作品であるといえます。

日光市の文化財 33

勝善碑ならびに馬頭観世音碑群



勝善碑ならびに馬頭観世音碑群は、鬼怒川公園駅北の小原交差点から約一キロメートル川治方面に向かった国道沿いにあります。天保一(一八四〇)年から昭和一二(一九三七)年にかけて作られた、大小五四基の碑群が街道の両側に点在していましたが、昭和三六年の道路改修の際に一か所に集められました。これらの碑は、馬の守護神に対する信仰がかかわっています。江戸時代、この辺りでは、会津西街道を往来する荷物運送による駄賃稼ぎが主要な収入源だったので、人々は馬を大切にしてきました。難所で事故死した馬を供養するため、死んだ馬の捨て場であった鬼怒川の断崖付近に一頭ごとに碑を建てたといわれており、当時の人々の馬に対する愛情がうかがわれます。



正岡子規と食

明治の俳人・正岡子規が、自分の体に一抹の不安を抱いたのは、肺結核による咯血のせいであり、このため「ホトトギス」の句をいくつも作つたそうです。ホトトギスは、漢字で「時鳥」や「子規」とも書き、口の中が赤く、鳴き声を真似ると血を吐いて死ぬといわれ、肺結核の代名詞であったといえます。そのようなことから、咯血した自分自身をホトトギスにたとえ「子規」と号するようになりまし。後に子規は、脊椎力リエス(脊椎の結核)も併発し病に苦しみます。しかし、当時の食事の記録を見ると、「朝：粥4碗、佃煮、梅干砂糖づけ／昼：粥4碗、鰯刺身、南瓜1皿／夕：茶飯4碗、なまりぶし、茄子1皿／2時過ぎ：ココア混ぜ牛乳1合、煎餅、菓子パン10個、梨2つ」など、病床にあり



ながらも、健康な人をしのぐ旺盛な食欲がうかがえます。子規が、学友の菊池謙二郎に宛てた手紙には、「或る時八死ぬるいやで泣き或る時八死にたくて泣く。併し泣きながらも猶大食致居候(大量の食事を続けています)」とあり、大量に食えることが、仕事の原動力であったように思えます。それでも、家族の留守中に小刀や千枚通しを見ては、死について考えることがありました。「死は恐ろしくはないが死への苦しみが恐ろしい」という子規の心中は、重病人であるがゆえの病や死への複雑な思いだったのかもかもしれません。作家により、作品を作り出す原動力は違いますが、その裏には、悩みや苦しみが、葛藤が隠されています。作家の人生を知ることにより、作品にもまた違った印象を持つことができます。作品を読むだけでなく、より深く作者の人物像を調べてみてはいかがでしょうか。

市民文芸

川柳 選者 山本都留米

そうだけと水に流せぬこともあり 石川みかん
後悔はしても言い訳できぬ意地 倉沢美江子
一枚の紙にも重き裏表 小島幸子
インフルで紙のマスクを布に替え 深谷和子
宝くじ宝にならず紙の山 酒井喜麿
暖冬の朝顔の花おちよほ口 白土武夫
フラッシュのポーズをとって時の人 湯沢和

俳句 選者 伊藤 清

冬ぬくし余生楽しき絵画展 樽谷ムメ
風すさぶ窓に煌めく冬銀河 渡辺ミチ子
華やかな過去は人にも落葉にも 荒井境子
誘導の目立つ手袋交叉点 佐藤知明
儂さや朝日にさつと消ゆる霜 星 陽子
あかぎれの痛みに目覚む朝かな 岩澤遊子
霜つれて北に煌めく星一つ 池田三夫

短歌 選者 阿久津伸一

俊足の時間から逃げて一休みもつと 丁寧に生きてゆきたい 関根眞佐子
川べりに咲き乱るる野の花のみどりの葉たち日ごと黄になる 大出喜代
岡倉は「アジアは一つ」と言うなるぞ五浦の海にそう問うてみる 福田きくい
浮雲に愁い委ねて寝転ばば癒しとなりてころ安らぐ 北崎 君
晩秋の沈む太陽赤々と世界を繋ぐ平和を祈る 大森トミ子
爪青き孫は二十歳の夢語る幼さ残るその唇に 和田よし
それぞれに主張があつて犬二匹主人は喜んで綱引きをする 白土武夫

作品を募集しています!

川柳・俳句・短歌を募集しています。氏名(ふりがな)、住所、電話番号を明記して、ご応募ください。応募先及びくわしくは 秘書広報課 広報広聴係 電話(21)5135・FAX(21)5109